

今年も恒例の「友の会ウィーク」開催 25のイベントを実施、約900名が参加 バラエティーに富んだ活動を披露する

「葛飾図書館友の会ウィーク」が昨年11月4日(月)から同24日(日)まで金町の葛飾区立中央図書館で開催されました。今回は11回目を迎え、前回も参加していただいた中央図書館の登録団体によるイベントに加え、「友の会」に新たに誕生した『イベントクラブ』が開催の協力を、また『昔語りの会』がこのウィークでデビューしました。“図書館からひろがる! ひろげる!”をテーマに、区内の図書館で活動している10団体と友の会の委員会やグループなどが日頃の成果を披露、25のイベントを開催しました。



お話会、絵本の読み聞かせ、紙芝居やマジック、手袋人形作りとその実演講座、手遊びや朗読劇、リコーダー演奏会、音楽会、映画会、CD鑑賞、また友の会の『多読クラブ』による図書館の「多読コーナー」にある英語の絵本を楽しむ入門講座、さらには実行委員会企画の森鷗外を取り上げた「映像文学館」など多種多彩。そして最後に『中央線沿線の文学風景』と題する特別講演会でウィークを締めくくりました。期間中は館内2箇所の展示コーナーを利用して「友の会」の活動や主催イベントを中心に内容の紹介をしました。

このウィークには幼児や子どもなども含め、延べ900名近くの方々が参加しました。以下、参加いただいた団体名です。おはなしたまごの会、かつしかシニア絵本の会、ザ・ハッピー、花だいこん、10(テン)の会、リコーダー友の会、“泉”朗読の会、ふたばの会、ルルルン音楽隊、紙芝居「飛行船」の方々です。

特別講演会(11月24日)

友の会ウィーク

「中央線沿線の文学風景～太宰治から村上春樹まで」 風景からたどる文学の楽しみ方

今年の講演会は三鷹市山本有三記念館の元館長の矢野勝巳さんにご登壇いただきました。文学と風景という切り口から中央線沿線に住んでいた文学者たちに迫る手法で文学を語っていただきました。特に「東京のようにつねに風景が激変している都市ではついこのあいだの都市風景が懐かしい。千年以上もの歴史を持ち今でも随所に古い町並みを残している奈良や京都とは違う。東京ではついこの間の記憶が大事である」という川本三郎氏の言葉を引かれた説明は、昨今の都市再開発の風景の破壊について考えさせられました。

中央線の歴史から始まり戦前、戦後そして現代の風景を作家の文章や実際の風景写真で幅広くお話をいただきました。

参加者からは「井伏鱒二と太宰治、石井桃子との出会いなど大変興味深く感じた」「読書の広がりへのヒントになった」という感想がありました。



～いま知る、文豪 森鷗外のヒミツ～



葛飾図書館資料の中から DVD による映像資料を選び、区民の皆さんにお届けする第 7 回目のイベント。今回は前回に引き続き古資料ともいえる「カセット文藝講座」の中から、作家・吉村昭の語りによって彼が敬愛する森鷗外像を紹介、さらに映画『森鷗外の恋人』(NHK 制作)で、森鷗外の処女作『舞姫』に描写されるドイツ留学時代の文豪のヒミツに迫る企画でした。

残念ながら、第 1 部のテープ再生が不調で、参加者の皆さんに失望を買いましたが、第 2 部の映画については「感動した」、「素晴らしかった」という感想を得ました。実際、ドイツ留学中に恋人が存在し、その別れの悲劇と小説『舞姫』の関連は今も伝えられる噂ですが、その後を追う研究者も絶えないようです。来場者は 38 名。アンケート結果によると、カセット資料は近來その価値が再認識されているようです。区内図書館の豊富なカセット資料をぜひご利用ください。次回も他の映像文学資料を選択し、企画を充実させたいと思います。

(友の会ウィーク実行委員会 高橋)

講演会と 6 人の語り手による昔語り

友の会ウィーク幕開けを飾って、昔語りの会の初めての会が催されました。第一部は昔話研究者の野村敬子先生の講演会です。会場はほぼ満席の約 80 名の参加で、昔話とはどんなものか、その成立ちや語られてきた背景や語り手の事などお話を頂きました。

先生の故郷である山形県真室川での採訪(昔話の採集)を通して、なぜ 60 年余りに渡り研究を続けることができたのか、それは昔話が「人と人の出会いの美しさ」がすべてだという事を熱を込めて語られました。そして、これまで昔話を通して、アジアの人々、特に女性達の生き方に関わり語られてきた昔話を聞き、それを語る人の生き様にふれたことを話されました。

第二部では、実際に今活動している 6 人の語り手によるお話を聴く時間です。これから語りをしてみたいという方々が対象なので、実際にお話を聴く体験は大変大切です。お話を語るという事は、まず語る人が楽しくなければ、その良さが伝わりません。この 6 人の語り手は、だれもが心からお話を楽しんで語っているので、聴き終わった時、皆、大満足で帰って行きました。

いよいよ 12 月から昔語りの会の開講です。語ってみたい方が何人いるのか大変心配していましたが、予想を超えて 30 名も受講者が応募され、嬉しい悲鳴を上げています。沢山の良い語り手が巣立つよう期待しています。

(昔語りの会 山浦)



全く知らない言語でシャドーイング

11 月 9 日(土)に、「英語多読入門～多読コーナーにある本を楽しみましょう!～」を行いました。当日は 18 名の参加があり、初めての方も 3 名いらっしゃいました。会の冒頭、リーダーによる多読に関する説明があり、絵本の絵を見て即座に英語を話す活動や、朗読の音声を真似するシャドーイングという活動を行いました。今回は「全く知らない言語の音を真似してみる経験」として、中国語のシャドーイングも行いました。その後、実際に本を読む時間を取り、テーブルごとに内容を紹介し合う活動になりました。自己紹介の時間も含め、英語で説明する方も多く、「英語を話す」ということへのモチベーションの高さを感じました。今後の講座では、英語でのプレゼンテーションなどを行う予定です。初めての方も、お気軽にご参加ください。(多読クラブ カ石)



今年是指先にのる黄色の“ことりん”作り

友の会ウィークイベントとして、おはなしくらぶがおはなし会以外で開催したのは2つ。1つは、11月6日(水)中央図書館と共催で行なった手袋人形講習会「ことりん&人形の遊び方」です。おはなし会ボランティア関係や親子での参加もあり、おはなしくらぶと合わせて約20名の参加者でスタート。図書館職員の3名の方を講師に、カラー軍手の指の先の部分を使い、針で縫ったりフェルトを切って貼り付けたりして、指先にちょこんと乗る黄色の愛らしい小鳥の人形を作成！完成した後は、おはなし会などでの使い方・演じ方を講師に学びました。「あかいとり ことり」などの3曲の歌に合わせて、講師のお手本を前に、生まれたばかりの“ことりん”が指先で踊りました。後半の1時間は、今までの講習会で作ってきた手袋人形（うさぎ、こぶた、くまのミトン、かえる、うさぎのミトン）の実演法の復習会も行いました。講師達におはなしくらぶのメンバーも混ざり、参加者の前で実演して見せる場面も。実演のポイントや注意点を細かく丁寧に講師に教えていただくことが出来、講習会は参加者にとっても好評でした。



～ゴザに座ってわらべうたを親子で楽しむ～

もう1つのイベントは、11月24日(日)に開催の、わらべうたの会「わらべうたであそぼう！」です。集まってくれたのは1歳に満たない可愛い幼児から小学生まで12人の子供達とお父さんお母さん方。皆さん床に敷いたゴザの上に思い思いに座って、早く来てくれた子供達はおはなしくらぶのメンバーとお手玉や布で作ったお魚を手にとって遊び、和やかな優しい空気感の中、会がスタート。四季のわらべうたを集めたプログラムを組み、一番最初は「せんべやけたかな」を目でも楽しめるパネルシアターで。つかみはバッチリ！子どもたちは、おせんべが裏返しになるのをワクワクして見つめていました。秋から冬、春そして夏へと全部で23曲。お手玉や手袋人形を使ったり、時



には立って円になって体を動かしたり、絵描き歌を間に挟んだりの内容に、飽きる子どもたちの姿は見えず、夢中になって遊んでくれました。特に、海の波を表現した「なみなみわんわちゃくり」は盛り上がり、最後の「とーだほしゃ～さかえ！」と歌いながら、折り紙のバタフライボールを割って中から星が飛び出す仕掛けには、子供達は大はしゃぎ！最高潮を迎えて終了できました。小道具は全ておはなしくらぶのメンバーの手づくりで、子供たちへ温もりが伝えられたらとの願いを込めて用意(少しでも伝わったかな?)。当日の持ち物の不備などの反省点はありましたが、参加者と共に楽しみ、充実感あるイベントになりました。
(おはなしくらぶ 鈴木)



50名以上の参加者が「新春かるた会」を楽しむ 上位入賞者は今年も女子小中高生が独占

恒例の「新春かるた会」が1月3日(金)午後、中央図書館で開催されました。今年で8回目を迎えたこの大会も認知度が増したのか、開場を待つ親子が出現するなど、大人から幼児まで楽しめる催しになったようです。まず今年初めての試みとして、会員のオカリナ伴奏に合わせ、大人が“年の初めの～”と、『1月1日』を懐かしそうに歌ってから、図書館職員が読む「かつしか郷土かるた」からスタート。次の百人一首を使った「坊主めくり」にはあちこちから歓声や落胆の声が沸き起こりました。

ちらし取りは5つのテーブルに分かれた予選ののち、各テーブルの1位による決勝戦が行われました。大接戦でしたが上位入賞者は昨年と同様、女子が独占。1位(中1)と2位(中2)は図書券、3位(小2)と4位(高1)は「郷土かるた」や図書館バッグが友の会から贈られました。また参加者全員は図書館から提供された雑誌の付録を選ぶのに悩みながらも嬉しそうにもらっていました。

今回の「かるた会」は大人30名に子ども24名と、昨年を大きく上回る参加者があり、主催者側の会員を含め60名を超える方々が楽しいひとときを過ごせたようでした。



歴史的な資料や北斎の浮世絵などを堪能



入館して初めに友の会の朝野会長からミュージアムの歴史・概要について説明を受けた後、約1時間にわたって見学しました。期待に違わず、外観・内装・展示内容ともに見事な美しいミュージアムで、中庭が観られる通路「知恵の小径」の脇に植えられた樹木の紅葉もきれいでした。

日本一美しい本棚といわれるモリソン書庫、国宝を含む貴重な文献など、見どころが多く、「天正遣欧使節記」「解体新書」「ペリー提督日本遠征記」など、教科書で見えるような書物やマリー・アントワネットが所蔵していた本など、歴史的な資料を多数見ることができました。企画展示の「北斎展」で

は葛飾北斎の浮世絵を堪能しました。

参加人数は少ないながら、良い見学会であったのではと思います。

参加された方からは、以下の感想等がありました。

- ・想像以上に素晴らしかった。
- ・このような機会がなければ来ることはなかったので、とてもよかった。
- ・ぜひまた参加したい。
- ・春から梅雨前や、秋など気候の良い時がいいいかもしれない。
- ・他の集まりと重ならない日にイベントがあると参加しやすい。

年度途中でのイベントクラブ発足という事情もあり、今年度の見学会は当ミュージアムのみですが、今後、来年度に向けて検討していきたいです。

(イベントクラブ 園田)



【東洋文庫ミュージアム】 東京都文京区本駒込 2-28-21

「東洋文庫」は、中華民国の総統府顧問を務めていたジョージ・モリソンの蔵書を三菱財閥の当主が購入、1924年に設立した東洋学の専門図書館・研究所。2011年10月に広く一般向けに東洋学について興味を持ってもらうことを目的として、ミュージアムが開設された。

☆☆☆☆☆☆「葛飾図書館友の会」で一緒に活動しませんか！☆☆☆☆☆☆

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただいて、あなたの図書館に関わるいろいろなアイデアを少しずつ実現してみませんか？ 友の会の開催イベント時でも直接の入会受付を行っていますので、是非ご利用ください。年会費は一般会員 1,000 円、賛助会員は 1 口 2,000 円です。上記の方法が利用できない場合、入会希望者は中央図書館に入会届をご提出の上、年会費を右記の口座に納入してください。図書館での年会費の直接納入はできません。「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、2020 年度年会費とご記入下さい。また 1 口 500 円の寄付も大歓迎です。払込手数料は窓口では 200 円、ATM からでは 150 円です。恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。

ゆうちょ銀行 口座番号 00100-7-392065
口座名称 葛飾図書館友の会

入会届はHP (<http://katsutomo.jimdo.com/>) からダウンロードできます。

お問合わせ先：中央図書館友の会担当者（打越さん、吉村さん、白井さん、川井さん、盛さん）TEL 03-3607-9201

『年明けてきのうと変わらぬ今日なれど夫婦（めおと）の猫と雑煮分け合う』。十九年前我が家に子猫が二匹やって来た。毛糸玉のように部屋の中をよく走り回っていた。男の子はよくミューミューと鳴くのでミューと、女の子はコロコロとよくこけるのでコロと名付けた。濃い目の茶トラの二匹はいつの間にか遅く育ち、ミューはチンチラのようにフカフカの長毛に包まれ、コロはアビシニアン（クレオパトラが愛した猫）のように凛々しく育った（飼主の最良目ですが）。同じ親から生まれたとは思えない姿だ。いつも一緒に仲良く横たわっている。この二匹が飼主主には必ず仕掛けてくる行事がある。毎朝四時頃に軽い猫パンチで起こされる。こちらが起きる気配がなると、少しずつ爪がのびてくる。適当なところで起きないと、顔が酷いことになるのでシブシブ起き、食事となる。お昼、食事コールは各食器の前で正座をして待つ。物音がしないので心配になり見に行くと、ジッと器の前で無言で待っている。それが氣を引く狙いのだが。夜は腕枕で川の字で寝るのが習慣。この一日の行事がいつ頃からなのかは定かでない。また、外出から戻る家の近くから猫たちの声が聞こえる。横を通る人たちがキョロキョロする。「ウチの子ですよ」と密かにドヤ顔をしてる自分がいる。『玄関に迎えて呉る猫たちを「ただいま」と両手に抱き上げたり。この猫たちに癒され、今日と変わらぬ明日を迎えられることが年最初のささやかな願いです。』

（小林広報委員）

色えんぴつ